ドルドの紋章

ダッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドルドの紋章

【Ｎコード】
Ｎ７０５８Ｖ

【作者名】
ダッチ

【あらすじ】
ドルドの紋章を持つ者は超能力が使える。
それは、人によって様々ではあるが、もちろん、一般人には出しえない力である。
そのような力を手に入れることのより、凶悪な犯罪は絶えることなく起きてしまう。
そこで、ドルドの紋章を持つものが最も憧れる職業というのは――サイコパワー・パージ・ポリス（通称トリプルＰ）である。
レックスは、ドルドの紋章を持ち、トリプルＰに就くのを目標とし

ているため
トリプルＰを育てるための教育施設、ＰＧ学園に入学する。

プロローグ

――これは、約２００年前の話になる。

文明の発達が一部の国で行われた。
それに伴い、国際間の格差問題が嘆かれるようになった。
未発達国は発達国の植民地とされ、奴隷のように扱われてきた。それを快く思う未発達国の住民がいるだろうか？
彼らは、大規模なクーデターを目論んだ。しかし、それには幾つもの困難が立ちはだかる。
まずは、人数では勝利しているが、武力では間違いなく劣っていることだ。
それに、発達国にとって彼らがクーデターを起こすことは想定の範囲内である。それに対応する術を持っている。
結局、未発達国はクーデターを諦め、このまま奴隷のように扱われ続ける選択を余儀なくされたと思った時――ドルドが誕生した。
もちろん、誕生しただけであって、誰もこの時に彼の超能力に気づきはしなかった。

彼の誕生から１６年後。彼もまた、不条理な社会の犠牲者となり、みなと同じく、憤りを感じていた。
そこで、彼は発達国相手に下剋上を行うことを決めたが、１６年前の計画の失敗を聞かされ、自分の無力さに悲嘆にくれていた時、彼は超能力を手に入れた。
前触れも説明もなく手に入れたこの力なら、変えられると信じたドルドは、下剋上を行う。
ドルドの活躍によって、奴隷制度は撤廃され、未発達国は人口が多いことから過密国と呼ばれるようになった。

その後、ドルドは平和維持組織（ＭＰＯ）を設立する。
世界の平和を守ろうと活動を続けているさなか、裏切り者ザバスによってドルドは暗殺された。
ドルドは死に際に最後の能力、『自分の能力を分散させる能力』を駆使して果てた。
後にザバスは処刑され、その１０数年後にかつてドルドが使っていた能力が使えるようになった人々が急増した。そして、その人々には体のどこかに、ドルドの出身国の旧国旗に使われていた紋章と同じ紋章が現れるようになった。

――これが、ドルドの紋章の始まりである。

チーム決め

ＰＧ学園の図書室にて、俺はドルドの紋章の始まりについての本を見つめていた。
「よ、レックス。何してんだ？」
爽やかなルックスと蒼い髪をなびかせて話しかけたこいつはベルツ。クラスメイトで、全寮制のこの学園のルームメイトでもある。
「いやぁさ、今度提出しなきゃいけないレポートがあるだろ？自由って言うんだから、ドルドの紋章の　始まりについてまとめようかと思って」
「へぇ、ちなみに僕はどうやって海が出来たかについてだ」
「……そうか。頑張って困難に陥るがいいさ」
こいつは、普通の人と感性がズレてる。今の俺はもう慣れたが。
「そろそろ、休み時間も終わりだよ？教室に戻ろう」
「あぁ、そうだな」
読みかけた本を閉じ、忘れないように軽くメモを取った後、本を戻し、教室へと向かう。

「さぁて、みんな～席についているかあい？」
５・６時限目はＬＨＲ。俺にとっては昼寝に近い。
そして、教卓の前で体を振り子のように揺らしながら、独特のイントネーションで話すこの先生は、性別は女で自称オカマのオネェ系教師コルート先生。はいそこ、ツッコんだら負け。
「この時間は、来週の中間試験についての説明をしちゃうわよぉ～」
ただただ単にテンションが高いようにしか見えない。
「試験は、三人一組で行います。三人で好きな先生を指名して、そ

の先生の元で試験を受けてください。細かいルールは先生によって違うので、運任せな部分もあるわ」
なんだそりゃ、随分と適当だな。
「質問は？」
内容が雑なのに、逆に分かりやすく、誰も疑問に感じるところがない。
「それじゃあ、グループを作ってちょうだぁ～い」
いつもより、激しく揺れている先生にもはやツッコミを入れようとする気すら起きない。
「とりあえずベルツは決定だろっ」
入学した時から馬が合うのか、一ヶ月も経ってないのに親友ってレベルに達しているベルツは即決定だ。
「後、一人はどうする？」
「そうだなぁ、バルモンドはどうだ？あいつは力持ちってスキルだ。神速のお前といいバランスになると思うんだ」
「残念、バルモンドはもう決まっちゃったみたいだよ」
「そっか……」
俺のスキルは魔法とアバウトだが、タイプ分けするとオールマイティ。ベルツは神速だから、スピード。なら、パワー系の奴がいれば、可もなく不可もない、いいバランスがとれていると思っていたんだが……他にパワー系は少ない。
「どうする……」
悩み続ける俺らの元に
「ね、ねぇ、ちょっといい？」
「ん？どうした？ルイ」
義務教育学校、つまりは中学の時に一緒だったルイが話しかけてきた。
「わ、私も……レックス達に混ざっていいかな？」
「お前……友達いないのか？」
「ち、ちっがうわよっ！」

「（コキッ）――なぁあああああ！」
あ、足が……今、コキッって……
「レックス、もうちょっと優しく接するべきだよ……」
「俺はお前が何の話をしているのかさっぱりだぜ」
「そ、それで……どうなの？」
「あ？んん～、そうだなぁ」
ルイのスキルは伸縮自在の体。タイプ的には……テクニックというかトリッキーというかそういう系統だろ。別に悪くはないが、力がないしな……
「んん～」
考え込んでる俺の元に
「レックス様！ぜひとも、このベティを参加させてくださいっ！」
「（ゴンッ）――ぬぅううあ！」
こ、今度は……鳩尾に……
「あら？どうされました？レックス様、お体の調子でも悪いんですか？」
「それよ…り……お…降りてくれ……」
「あら、やですわぁ、ベティったら、まだ床入り前なのに」
「嫁入り前と言った方がさらに奥ゆかしいんだが……」
「ちょっと！私が先に誘ったのよっ！」
「先も後もないですわ。レックス様に必要とされているかどうかですわ」
「だけど、順番ってものがあるでしょっ！」
「あら？なら、先をお譲りしますわ。どうせ、レックス様に断られて終わりでしょうけど」
「そ、そんなことないわよっ！」
「ね、ねぇ、君達、ここはジャンケンで決めたらどうかな？」
「「部外者はだまっててて（ほしいですわっ！）っ！」」
「ご、ごめん……（そこはシンクロするんだ）」
「でも、これじゃ、埒が明かないし、ジャンケンで決めてくれ」

ベティのスキルは空気中の水分をミクロ秒で氷に変えるという能力。パワー系としてはちょっと不足だし、この際どっちがチームでも構わない。
「そ、そう……レックスがそういうなら、そうしようかな」
「我を貫く女性はモテませんもんね。ベティも異存はありません」
「じゃあ、早くやってくれ」
「「最初はグー、ジャンケン……」」
なぜか、続きがこない。
「は、早く出しなさいよ」
「あなたこそ、何を躊躇っているのですか？」
二人は左手で右手を隠し、さらに腰に当てているまま、一向に進まない。
「決まんないなら、別の人に頼むわ」
「「ポンッ」」
なぜか、二人は急に出した。
「ベティの勝ちですわ」
「う、うう……負けちゃった……」
「落ち込むなって、別に試験に落ちた訳じゃないんだし」
「ふんっ」
「（ドンッ）――ぶふっあああ！」
俺はなぜルイに顔面を殴られたか見当がつかなかった。

誤解

今度は誰の試験を受けるかについて話していた。
「ベティはレックス様に着いて行きますわっ！」
「……そうだな、こんなことを言っちゃなんだが、試験内容が楽そうな先生を選んだ方がいいと思う」
「それは、いいと思うよ。試験ごとにクラスが入れ替えされて、万が一最低クラスになっちゃったら、そこから這い上がるのは厳しいからね」
今のクラスは別に強い順に並べられた訳じゃない。ベルツが言った通り、試験ごとにクラス編成がおこなわれる。それ以降の試験で上位クラスに入ろうとしても、かなり困難だ。だったら、今の内に最高クラスになって、最高の教育を受けた方が下がることは皆無だ。
「だったらさ、数学のクルガ先生は？」
「でも、数学だろ？急に数学の問題を解けって言われても、俺には無理だ」
「いや、たぶん、クルガ先生なら、簡単な問題を出してくれるはずだよ」
「そうか？……分かった。クルガ先生にしよう」
こうして、担当教師を決め、今日は終わった。

――次の週
今日がその試験だ。別段、緊張もしないけど、余裕ってわけでもないこのモヤモヤした気持ちのまま教室に入る。
「こうして、手を組んでると、まるでカップルみたいですわね」
「……お願いだ。ベティ、離れてくれ」
「ええっ？なぜ、そんな冷たいことを言うのですか？」

「いや、なんでって言われても……」
正直、面倒くさい。
「――っ！――――――ぁっ！」
後ろで変な声が聞こえたので、振り返ると。
「ん？どうしたんだ？ルイ」
「も、もしかして……レックスは…私が知らない間に……べ……ティとそういう関係になったの？」
「んあ？」
黙って、腕を見る。
「……いや、誤解だっ！別にそういうわけじゃ――」
「その恰好で言い逃れはできないわっ！」
「あらっ？気づいてしまったの？そうよっ、ベティとレックス様は一晩一緒に寝ましたのよ」
「お前は余計なことを言うなっ！」

――それは、昨日の事。いつものように、部屋でベルツといた。
「……ウサギが１ピョン、２ヒョン」
ベルツの寝言にツッコミを入れたいのをグッとこらえつつ、課題を終えたので、眠りについた。
その、約３０分後。
俺は若干寝相が悪い。だから、いつも寝返りをうつ。その時も、変わらず寝返りを打っていた時。
――ムニュッ
効果音で言えば、そんな音がした気がした。っていうか、この空間で寝返りを打つのに大変不自然な音だからちょっと目を覚ます。
すると――
「レックス様ったら……まだ、みんな寝静まってないのに、待ちきれないんですね……」
「そうなんだ、なかなか寝付けないんだよ……って！なんで、お前がここにいるんだっ！」

「レックス様、静かにっ。周りに迷惑がかかりますわ」
「ああーーっ！一番迷惑を掛けてる奴に言われたーーっ！」
「んん？……どうしたの？レックス？もう、朝？」
「ちょうどよかった。ベルツ、ベティを部屋に返すぞっ！……つうか、お前なんで俺の部屋知ってんだ？」
「やですわ……恋する乙女なら、学校のコンピューターをハッキングして、好きな人の部屋の番号とセキュリティ解除くらい容易ですわっ」
「どっからツッコめばいいんだっ！？まず、そんな特殊な行動を恋するって動機でするんじゃねぇっ！それと、それは決してほめられることじゃねぇっ！」
「レックス様……一緒に寝てくださいっ！」
「せめて、脈絡をつけてから言えっ！」
「大丈夫、レックスッ！僕が言うのもあれだけど、痛いのは最初だけだと思うよっ！」
「よしっ、お前はこの状況では役に立たないことに気付いた」
「照れるな……グーガー」
「なんで、眠りにつけんだよっ！？それと、ベティ！俺のズボンを下げるなっ！」
「あぁ、ごめんなさい。自分で脱ぎたかったですか？」
「誰か、俺を助けてくれっ！」

――結局、俺はベティの部屋を知らん上にあいつは微塵も口を割ろうとはしなかったので、あいつが寝てから寝ることになった。おかげで、寝不足だ。
「へ、へぇ……レックスって、そういう人なんだ……」
「だから違うっ！こいつが言うとそういうニュアンスに聞こえるが、俺は本当に何もしてないんだ」
「確かに、レックス様は今朝、浴槽で寝ていましたね」
それは、お前がいたからだ、ネグリジェ姿で。

「そうか……レックスは……」
「何か言ったか？」
「いいや、じゃあ、レックス」
「何だ？」
「今回の試験、わ、私が……レックスに勝ったら……一緒に……寝て…くれる？」
「はぁ？何を言ってるんだ？お前は？」
どういう話の経緯を辿ればそこに行き着くのだろうか？
「ひどいっ！ベティとは寝たくせにっ！」
「（ドゴンッ）――ぶはぁぁああ！」
なぜかルイの渾身の右ストレートが頬に炸裂した。
これから試験だというのに、前途多難だ。

第一関門

「はぁい、みんなぁ～、席ついたぁ？」
「「「……」」」
無視している訳じゃない。黙っていることで欠席者はいないことを示しているのだ、マジで。
「今日は、試験だけどもぉ～、チームでやることだしぃ～、一人のせいで下位クラスになったとしてもぉ～、連帯責任だからねぇ～」
「「「……」」」
「みんなぁ～、返事しないとぉ～、順番にあたしの胸を触らせるわよ？」
「「「分かりましたっ！」」」
色仕掛けとは、卑怯な先生だ。
「ちゃんと、ルールは理解してるわよねぇ～？」
「「「はいっ！」」」
「それじゃあ、チャイムが鳴ったら一斉にスタートよ～」
その言葉から教室の空気は緊張で包み込まれた。

――キーンコーン
「それじゃあ、スタ～トッ！」
一斉に教室を飛び出す。
「みんな、速いな」
「言ってる場合か？俺達も行くぞっ！」
「でも、クルガ先生の居場所が分かりませんわ」
「そうか。そこからか……」
大体の連中は、戦略だったり、武術だったりとおそらく試験が戦闘でもあり得る教師を選択している。俺達は、唯一の数学選択だ。まず、クルガ先生を探さなければならない。この試験では、試験担当の教師を探すことから始まる。他の連中が選択しない分、情報を

手に入れるのは難しい。
「数学を教える、数学教室にいる可能性が一番高いね」
「よしっ、悩んでても無駄だ。まずは、そこから洗ってみよう」

「よう、随分と早いじゃねぇか」
予想通り、クルガ先生は数学教室にイスの背もたれにもたれながら、ダルそうにしていた。
「まぁ、予想したところに先生がいたのでね」
「そうか。俺の試験を一番最初に受ける生徒も久しぶりだな」
「話はここまでに、そろそろ試験を出してくれませんか？」
「ふぅ…せっかちだな。ちょっと待てっ。今から、あるモノを用意すっから」
後ろに置いてあるダンボールからそのあるモノを取り出す。
「風船？」
「そうだ。お前ら、一個ずつ、頭の上につけろ」
指示通りに、風船をつける。
「俺からの試験はこれだ。風船一個を破裂させろ。ただし、風船がゼロになった生徒は即脱落だ」
「ええっ？」
ベルツが驚く」
「あぁ、別に脱落してない生徒は次の試験を受けられる。脱落した生徒のみ減点し、合格者には点数をくれる」
「で、でも……」
「もし、６０分以内に一個も破裂させなかったら、全員不合格だ。さ、はじめ」
そう告げると、先生はまたダルそうにもたれ始めた。
「それって……誰か一人を落とせってこと？」
「それならば、この男を脱落させましょう」

「ベティさん！？そこは、自分を犠牲にする場面じゃないっ！？」
「何言ってるんだ？誰も脱落しねぇよっ」
「えっ？ルールを理解してたかい？」
「なぁ、クルガ先生。ルールはさっき言ったので全部ですよね？」
「あぁ、そうだ」
「なら、大丈夫だ。ベルツ、ちょっとジッとしてろっ」
「まさか、僕の風船を割る気？」
「いいから」
「……分かったよ」
「――えーっと、どうするんだっけ？こんな感じか？はぁー」
俺は左手にドルドの紋章の力を発揮するときに消費するデバイタと呼ばれるものを集める。
ちなみに、紋章のスキルの発動には、二種類ある。
俺とベティのように、戦術的なスキルにはデバイタを消費する必要がある。
ベルツとルイのように、自分の体に関するスキルには、デバイタの消費は必要ない。
「はっ！」
掌に集まったデバイタを消費し、軽く魔法を使う。
「どうだ？」
「あぁ、風船が二つになってる」
今、俺が使った魔法は物質をコピーする魔法。ただし、大きすぎたり、密度が高すぎるものには今の所使えないが、風船程度だったら、千個は軽い。
「そして――」
――パァンッ
指から相手の皮膚を軽く焼くことのできるビームを発射。ベルツの二個の風船の内、一個を割る。
「スキルを使っちゃいけないとも、風船を増やしちゃいけないとも言ってない。それに、風船がゼロになったら脱落。まだ、ベルツの

風船は一個残ってる。風船はちゃんと一個破裂させた。ちゃんと条件は満たしていますよねぇ？」
「……ふっ、合格だ。三人とも」
「やったっ」
「やりましたわっ！流石はレックス様っ！」
「これが、次の試験の教師の名前だ。頑張れや」
「ありがとうございます。それではっ」
挨拶を済ませ、次の先生探しを始めた。

「……初めて、全員合格したな。前は、それぞれを蹴落とそうとして、その後はぎくしゃくして見事全員不合格になったのにな……」
クルガは窓から覗ける分厚い雲を眺めながら、それを零し、そして微笑した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7058v/

ドルドの紋章

2011年8月13日03時25分発行